

最高道德の特質

——その理論的・心的・行為的側面から——

玉井

あきら
哲

目次

- 序
- 一、モラロジー研究と最高道德
 - (一) モラロジー研究の方向
 - (二) モラロジーの目的と最高道德の実行
- 二、最高道德の理論的側面
 - (一) 最高道德の定義
 - (二) 最高道德のイデー
 - (三) 最高道德の現実性と超越性
- 三、最高道德の心的側面
 - (一) 最高道德の心使いへの道
 - (二) 最高道德の心使い
 - (三) 自我没却と神意同化
- 四、最高道德の行為的側面
 - (一) 最高道德の存在根拠
 - (二) 最高道德的行為
 - (三) 伝統尊重と人心開発救済
- 五、最高道德の特質

序

モラロジーは広池千九郎博士（以下広池千九郎と標記する）という、自らを最高道德の開祖と称し、聖人の思

想、生き方、教えそのものを自己の生の骨肉とし、幾度となく批判、吟味、反省を加えて、理論づけられた新しい学問体系である。従って学祖の生そのものを中核とし、広池千九郎の生全体を通して実証され、それを社会科学、歴史学、自然科学などの諸科学により学問的に体系づけ、学として世に問うた「新科学としての道德科学の論文」と言うことができる。(「予の過去五七年間における皇室奉仕の事跡」四ページ参照)

ただ、歴史に生まれては消え、又再生を繰り返して、存続していく精神的、実践的集団の変遷を眺めるとき、歴史に生き残っていく集団(例えば二千年、三千年と息づき、人類の叡知の根源ともなってきた儒教、仏教、キリスト教などに代表される大小さまざまな思想集団や教団)の特徴は、絶えず他者との闘争を繰り返しつつも、その中心的精神体系、もしくはその中核となる思想の実現とその実践の証のあとを体系化することに、(デカルトのいう明晰判明とまでは行かぬとしても)真摯な努力が繰り返され、理論的に(論理的に)表明・展開せられていること、そしてあわせて時代状況に相応しく表明しようと、絶えることのない工夫を繰り返していることがわかる。モラロジー研究の今後の継続性、社会性、発展性ということを考え、最高道德に関する学的研究を試みる時、モラロジーの隣接諸科学との対決とともに、現実社会生活の中での最高道德の価値を明確に証明しなくてはならないことを痛感する。今回の小論は、「最高道德の特質」を哲学的・人間学的に明らかにして行くための第一段階である。

一、モラロジー研究と最高道德

(一) モラロジー研究の方向

私の考えている「モラロジー研究」の課題は、道德科学の中心概念である「最高道德の実質とその内容」が、どのような意味で又はどのような学的根拠に基づいて、普遍妥当性のある真理を提示していると言えるのかを問うことである。

しかし一方、このことは同時に「モラロジーの中核概念である最高道德は、広池千九郎博士によって既に、世界聖人に共通一貫するものとしての五大原理という形で体得・実証され、完成された宇宙自然の大法則である」という大前提に対して、批判的精神をもって研究を進めるといふことを意味している。

確かに、広池千九郎の晩年の著作物や講演等に接すると、最高道德への絶対的な確信と信念を垣間見る事が出来る。

『道德科学及び最高道德の実質並びに内容の概略』の自序にも、次のように記されている。

「新科学モラロジー並びに其實質及び内容を為せる所の最高道德は、我が祖宗大神の御宏謨とこれに一致する所の世界諸聖人正統の教説と其事跡とにして、從來全く利己的本能に本づきて成立せる所のありふれたる精神科学並びに因襲的道德と、其實質及び内容を異にせるものであります。故に一たびモラロジーを研究体得せば、何人にも万人の上に立ち得る資格を造る事を得、且つ永遠不朽の地位、幸福を獲得する事を得るに至る事、モラロジーの科学的研究に依って確定せる所であります。」(句点筆者)

しかし、モラロジー研究所が研究機関として、最高道德の妥当性を学問的に証明することを課題として行くかぎり、その探求に終わりはないことを覚悟せねばならない。学というものは、限りなく真理の探求のために、理解と批判と統合を繰り返すべき性質のものであり、真理は完成してそこに存在するという状態で把えられるのではなく、真理は絶えず呼び戻されねばならない(wiederholung)と云うものである。

例えば、仏教の修行により悟りを開いたとしても、その悟りの内実を真理として表明する時、その瞬間、その理論的説明が真の悟りの内実を表明しきれぬものではないことに思い当る筈である。まさに「大法は心にあり、小法は形にある」(『道德科学の論文』第九冊目二九四ページ、以下『論文』⑨二九四ページと標記する)と言われるゆえんである。

また、仏教的な意味での悟りが、キリスト教の愛の実践と、またイスラム教の愛と正義と、また多くの哲学者たちが表明してきた哲学的真理とどのような関わりをもっているかなど、明晰判明な形で表現したり、把握するといったことは容易なことではない。その間の真理説明は絶えずゆれ動いている。真理が揺れ動いているというよりも、真理の捉え方に限りない広がり可能性がある、といった方がいいのかも知れない。

一つのテーゼができれば、必ずアンチ・テーゼが提示される。そして一つの統合ができ、またテーゼができたように思えたとしても、現実には絶えず、アンチ・テーゼをつきつけてくる。そこには絶えざる真理説明への闘争がある。究極の真理を求めながらも、人が神を規定しきれないように、真理を絶対化し、独占していると宣言した瞬間、真理は真理でなくなるのである。

ドイツの哲学者K・ヤスパースが「愛しながらの闘争」のうちに、実存開明へと促されたのも、また、ヘーゲルが「精神現象学」の中で明らかにした「真理は全体の内にある。真理は否定を媒介として始めて真理となる」という一大テーゼも、真理や全体知へ至るための人間としてできる努力の最善の方法であることが理解されねばならない。

いやそれ以上に、真理は常に未来に開かれており、今発見されたかに見える真理は、その瞬間、未来の真理発見の為の基礎石であることを自覚せねばならないのかも知れない。

モラロジの最高道德も、宇宙から自然・人間に及ぶ諸現象を体系化した真理説明の一つの立場である限り、他の真理表明との対話、対決を抜きにして独り孤高の学として留まるべきものではない。もしその対話をやめたその時から、モラロジは一つの神学、護教学にとどまり、学としての普遍性を問うという学本来の領域から身をひき、学問の生命である限りない反省の精神に、自らの手で閉ざしてしまうことになる。学が学である為にはその本質に反省という態度が要請されるのである。

(二) モラロジの目的と最高道德の実行

モラロジは「世界永遠の平和の基礎を成すところの一つの専門学」「品性完成の科学」であると言われ、その目的は「あまねく道德及びこれに関係ある諸科学の原理を闡明するにあれど、その研究の究極の目的はこの最高道德の全人類に必要な証左を科学的に提供することにある」(『論文』①五八ページ)と述べられていることから、モラロジの課題は「最高道德の必要性を全人類に科学的に立証することにある」と明言されている。

しかし、モラロサイエンスの草稿のなかには、

「本書は道德実行の効果を科学的に証明し、併せて最高道德の合理的説明をなすということが書き表されてありますけれども、それは甚だすまぬ事にて、私は心ひそかに恥ずかしく存じております。その故は、もと私がモラロサイエンスを組織する動機と目的とが、一つの新科学を造るという事でなくして、最高道德を人類に推薦してその人心を救済したいという一つの信仰から起こった事業でありますから、まず私のこれを作る心持ちが純学究的でないのです。」

と書かれてあり、広池千九郎自身その意図そのものに課題を含んでいるという自覚をもっていたことがわかる。

即ち最高道德の価値概念の位置づけと、その必要性を学的に論証するという目的と、最高道德によって人類を救済するという実践的・教育的目的が（参照『論文』第三緒言第三条）混在し、どちらかと言えば、後者の実践的・教育的目的が勝っていたことがわかる。

広池千九郎没後五十年以上を経過して、私達はその原点にもどって、「最高道德の実行」によって自らが救われ、生かされ、育てられ・守られているという体験の証しのないところに、最高道德そのものの生命も最高道德の学的基盤も無いことを、深く自覚しなくてはならない。

広池千九郎は自らの悪戦苦闘の生涯の中から、最高道德という価値概念を結晶化させ、後学の人類に偉大な遺産を残したわけであるが、その事業は完成しているわけではない。広池千九郎と同じ作業、即ちその同じ志と精神をもって、現実の政治・経済・教育活動を遂行する中で道体験していく過程を通して、私達は初めてモラロジ―研究に広池千九郎の生命を受け継ぎ、モラロジ―の目的を実現していくことになる。

『道徳科学の論文』には、モラロジ―（道徳科学）と宗教・哲学・倫理との学問的性格の相違について述べられているが、最高道德という価値概念を、従来の学問的伝統の価値概念をふまえつつ、しかも挑戦しつつ、その独自性・特質を明らかにするという課題は、後進の学徒の絶えざる使命である。この小論は、そのための一つの試みである。

二、最高道德の理論的側面

正しいことを知る人が正しいことを実行できる。従って、正しい実行には正しい知が先行する必要がある。最高道德を実行するためにも、広池千九郎に倣って、正しい実行の姿を知る必要がある。更に、真に知るためには、

理論的・学問的試みと同時に、人間学的・実存的アプローチを遂行しなくてはならない。本章は、その理論的試みである。

(一) 最高道德の定義

『道徳科学の論文』には、最高道德を次のように定義している。

※ 「聖人の教訓、教説及びその実行せられたるところの最高道德なるものは、まさにこの天地自然の法則もしくは天地の公道に当たるので、人類進化の原動力であるのです。」

※ 「右の明德とは、（中略）天地自然の法則・天地の公道・人類進化の法則すなわち最高道德を指す。」
（『論文』①第二版自序八ページ ②同上二九ページ、四一ページ）

※ 「最高道德は、その諸聖人の教説及び教訓に一貫せるところの宇宙の真理及び人類生活の諸法則の原理でありますから……。」
（『論文』⑧一七六ページ）

※ 「最高道德は神の精神の発現にして、諸聖人の実行せるところであり、且つ正しき宇宙自然の法則であるが故に、……。」
（『論文』③三六〇―三六一ページ）

※ 「最高道德はすなわち前記のごとく神の心に立脚するものでありますから、いわゆる、人間の最高の学問・知識・思想及び信仰に当たるのであります。」
（『論文』⑧一四八ページ）

※「最高道徳は宇宙根本唯一の神の心を体得実現せる世界諸聖人の実行せるところの道徳に一貫せる最高原理であります。」

〔論文〕⑦二二二ページ

※「最高道徳は世界の諸聖人が宇宙根本唯一の神の心△慈悲心▽を体得して実現せるところの道徳であって、自己の最高の品性を形成せんとする動機及び目的から出発しておるのであります」

〔論文〕⑦四ページ

このように、最高道徳の概念・定義を整理してみると、「天地自然の法則」「諸聖人の体得・実現した慈悲心」「神の精神・心」などと要約することが出来る。

しかし、その実質と内容については、神の心とか、諸聖人とか、宇宙自然の法則という抽象的用語に出くわすばかりで、それら抽象的概念について、習熟して来ない限り、実感として理解することは困難である。また理解の内容も専門性の違いによりバラバラになると思われる。

ここで私が、理解困難と言ったのは、広池千九郎をはじめ、明治・大正の儒教や神道・仏教を中心とした精神文化の中で生活していた人々には、実感として理解し得た用語自体も、時代の変遷と共に、その言葉のもつ意味を改めて把握し直さなくては、無味乾燥な同語反復と化してしまふ危険性があるということである。「自然の法則」「神の心」といった言葉の内実を、現代に生きる私自身が *Wiederholung* (反復含味) することの必要性を痛感するがゆえである。

そもそも最高道徳とは何なのか。「天地自然の法則」「諸聖人の体得・体現した慈悲心」に従って生きるとはどのようなことなのか。それは非現実的な観念・観想の領域の問題で、日常の人間本性に基づいて、あるがままに自己実現を目指して生きるのとは違った次元のことを表現しようとするものなのか。それとも道徳という限り、人間関係を巡る日常性の次元の事なのか。「最高道徳」という言葉に託した広池千九郎の真意を理解するために、広池千九郎との対話がどうしても必要である。

(二) 最高道徳のイデー(理念)

最高道徳は、哲学、倫理学、宗教学といった価値を扱う諸学問との関係において、どのように位置づけることができるであろうか。普通一般に言われる宗教の悟りや哲学的真理や絶対知や超越的智恵と言われる、ある一種の精神的に崇高で純粋な次元と同様の、超越的・精神的地平を開示していると言えはいいのだろうか。

今日の全世界の諸学の発端に、西洋で言えばソクラテス、プラトン、アリストテレス、そしてイエスキリストがいる。東洋で言えば、孔子と釈迦に発する儒教と仏教がある。(マホメットについては、広池千九郎自ら「自ら一度トルコへ行って、その信徒に交わりて後に書く」(モラルサイエンス草稿集、第七集七八ページ)と述べている。)人類は今日もなお、これら四つの源流から発する叡知の世界を、それぞれが分有しつつ、共有することへの努力を繰り返し、絶えず正義と自由と独立を求めて苦闘し続けている。

広池千九郎はそれぞれの哲学、ならびに宗教の始祖となっている諸聖人の教説・教訓・実行に共通一貫するものを、「最高道徳」という概念に統合し、その中心思想を体現した行為原則を五つの実践的原理として提示した。この背後には、広池千九郎に確信的な「人は宗教(心でなく形式)において別の道を歩むことがあっても、人間として、自己の成長と社会的正義の実現を目指すという最高道徳的次元において、一つになれる。それが諸聖人の教訓である」という理想と信念がある。

ただ、確かに今日、少しく現実を見る常識ある人なら、現実が単純な真理のもとに解明されると言った、新興宗教まがいの世界観に騙されることもないし、普遍宗教を自負する宗教家でさえ、誰一人として、全世界が一つの宗教に（例えば、唯一仏教に、キリスト教に、儒教に、イスラム教に帰一し）統合されると考える人はいない。その限りにおいて、人類は今、宗教（教義・信仰形態及び生活様式など）において一つにならぬことを自覚しつつある。しかし一方、人類は、現実の諸問題の解決は、宗教的次元において実現し得ぬとしても、東西文化の融合と相互理解を目指した、人間的・倫理的・道徳的次元において、その普遍性と共感性の得られる地平を探索するという可能性は限りなく残されているということを信じて疑わない。最高道徳のイデー（理念）はこのような信念に基礎づけを与えようとするものである。

このような視点に立つて考えるとき、広池千九郎の遺した「最高道徳による人類の安心と平和と幸福の実現」というイデーは、六十年前の試みであるとはいえ、全くそっくりそのまま、我々の今日的課題である事を、改めて確認することが出来る。

(三) 最高道徳の現実性と超越性

しかし、上記「最高道徳のイデー」にしても、それが一般に理解されている宗教や道徳と、学問的にどのような点で重なり、どのように異なるのかと問われるとき、最高道徳の学的位置づけにたいする吟味が不可欠である。「最高道徳は宗教とは違う」「最高道徳は普通一般に言う道徳とは違う」とは、モラロジー一般の論理である。今日までこの宗教や倫理・道徳との相違を明らかにしようとする試みは、数多くの研究者によって幾度となく繰り返されて来た。しかし最後のところで満足の得られるものではなかった。と言うより「最高道徳とは何なのか」

という問い自体に学問的に答えるという課題そのものが、それぞれの時代の人々が、自分で絶えず繰り返し、答えていくという性質のものであるように思えるのである。

諸学の領域設定、定義付けという仕事は、探求すればする程迷路に入っていくように思える。一般的には、確かに次元において宗教と道徳は異なっている。しかし、宗教と道徳とは密接につながっている部分もあって、道徳的判断の奥に根源的な宗教的信仰と信念が隠されているとも言えよう。従って「道徳さえあれば何事も解決がつく」といったところで、それで割り切れる程、人間の本性というものは簡単ではない。道徳の次元の方がもっと普遍性を欠くのではないか、という反論も聞こえてくる。また、人間の信仰心・宗教心における共通普遍なるものの地平を相互理解することが、より本質的・根源的なアプローチであるというのが一般諸学問の趨勢ではないだろうか。しかし、宗教の次元の超越性が現実から遊離するとき、そこに宗教本来のもつ生命力も形骸化してしまう危険性もある。

広池千九郎は、このような人間の崇高さや美しさと弱さや醜さを、ともに具有する明暗双々の普遍的な人間性を直視しながら、宗教の次元でなく最高道徳を提唱したのである。従って、広池博士は一般の諸学の常識に真向から対決・挑戦をしているということに思いを致さなければならぬ。

最高道徳という観点から広池千九郎の生涯を見ると、先ず目につくのは広池千九郎の自我没却と神意同化への限らない努力である。そこには、自分の高い・固い・冷たい心を、低い・柔らかい・温かい・すべてを包み込む神の心へと入れ換えようとする決意と、そこへすーっと簡単に辿りつくことができないで、悪戦苦闘している姿が浮かび上がって来る。

そのような広池千九郎の姿に接していると、最高道徳は宗教に置き換えることはできない。しかし、自我没却・

神意同化、慈悲寛大自己反省などにみられるように、究極のところでは宗教心と深くつながっている。一方、現実の赤裸々な社会生活の中に生き、人倫的道德の美点を尊重しながら、普通に言う道徳の次元よりもっと純粹で、その道徳を神の前での道徳にまで高めたところでの道徳を考えていることが解る。

従って実践・実行の領域では、日常的・現実的道德の次元とつながりながら、心使いの領域では、宗教的・超越的次元につながり、その道徳のもつ日常性を、究極的な神的次元にまで昇華させようとする性格を持つものとして、最高道徳と呼ばざるを得なかったと思えるのである。

言い換えれば、最高道徳という表現には、人間を心情と行為の両面からとらえ、最高道徳的心づかいと最高道徳的行為がつねに含意されていて、心使いの領域では、普通にいう道徳の次元を超越し、宗教的・神的次元につながり、行為の領域では宗教とは異なり、形式に流され易い日常性・現実性の真つ只中に身をおいて、高等円満な常識（中庸）に生きることが意図されているようである。

そこで次章では、最高道徳の心使いの側面に光を当ててみよう。

三、最高道徳の心的側面

(一) 最高道徳的心使いへの道

広池千九郎は、二十代よりの研究生生活と闘病生活の中で、何度も宗教に接近している。しかし、三十代後半からの神道研究の深まりと、その一派である天理教に出会うまでは、宗教心——すなわち己の理性的判断と行為の全てを無にし、ただ一筋に神の御心、神の力に委ねるという心境——を持し、その心使いで生きることの偉大性を体得する事はなかった。

「元来、私は若年のころより、好んで儒教、仏教及びキリスト教の経典を耽読しておって、モラロジーのいわゆる最高道徳の要諦はこれを理論的には体得しておったれど、これを日常生活に実現する具体的方法は、いまだこれを十分に理解しておらなかったのであります。」

（『回顧録』四―五ページ）

これは、宗教を、合理的・客観的に「救いを求める信仰形態」と扱っている間は、宗教心の核心に触れるには至らないということの証しでもある。学位論文をまとめあげ、生命の一大危機に遭遇するまで、真に自我没却するという決心はつかなかつたといつてよいのかも知れない。普通の常識的、道徳的立場から言うところである。しかし、超越的、最高道徳的立場から言うところにはならない。学位論文をまとめ上げるまで、神は広池千九郎に生命を保たせ、その一大事業の後に生命の一大危機を与えてくれる程、寛容にして寛大であったと言えるのではないか。三大自己反省にも現れているように、天理教に出会い、宗教の本質は、自らが神の心に至ること即ち誰をも排斥せず、低い柔和な心で、相手の助かるように、相手の育つように、忠誠努力して要求しない神・聖人の姿に倣い、その心になり、生ききることである事を発見したのであるが、それは人間広池千九郎の努力のみによって達成された境地ではない。まさに以下に述べるような試練を恩寵として受け止め得たというところに、最高道徳的心づかいの真髓がある。

大正三年六月二十六日の日記には

「一昨年の大病は、御道一条になりて御地場に引き寄せらるるためなり。爾来一か半年間働かせていただきしが、今回の御手入れは、一層御道の真の心使いになり働かねば世界の目標となるに足らざるがゆえに、かく御手入れありしものと考え。」

今回感得せる事実、おおよそ左のごとし。

○日々低きやさしき心使いにて陽気に暮らし、心を長くのどかにし、一切何人にも不足を思わず、また一切何人をも心にて見下すことなく、悪しく思うことなく、心の底から人様を立つること。この治定にて助かりたることを堅く後日に忘れざること。」

大正四年四月七日の日記の条には

「今回のこと一切自己の因縁とし、一切自己の不注意、高慢心の若干の現れと自覚して、神様、教祖様、先管長様、御本部部下各方面へ心を下げ、敵を愛する心になれば身上宜し。少し自分は不足はないが、他から同情の語を受け、自己の心動けば発熱の気味あり。恐るべし、恐るべし。」

蒲生会長来られ、あまり予の近来、信徒より景慕せられしことを説き、かえてこれで助かれりという。

予はもちろん今回の事を、我が生命ととりかえ下されしものとして喜び居れり。甲賀会長も、やはりかくのごとくいえり。」

また『回顧録』には、大正元年以来の決意を次のように述べている。

「かくのごとき重態に陥り物質的治療において全く窮まったので、ただ死を待つの外なかつたのであります。ここにおいて同夜私は神様に向かって、改めて祈願をしたのであります。その祈願の趣旨は、『今日の大患にて到底生命のあるはずなけれど、もし神様が私に一年の生命を貸して下さったならば、人心救済に関する世界諸聖人の眞の教訓に本づくところの前人未踏の眞理を書き遺しておきましょう。もしまた、さらにこ

れより永き生命をお貸しくださいませならば、当年一月四日お地場にて誓いしごとくに、私の学問、名譽及び社会の地位全部を神様に献納し、生きたるままに神前の犠牲となつて人心救済をさして頂き、全人類の安心、幸福及び人類社会永遠の平和の実現に努力さして頂きましょう」ということであります。」

このような大正元年の大患、四年の困厄という絶対絶命的な限界状況に立つて、広池千九郎は神と対峙し、神のもとで安心を得るといふ心の地平に辿りついたのである。この体験過程こそが、最高道德の心使いと実行の原点であり、ここでの体験無くして最高道德は無いと言えよう。私は、この状況はまさに、「神が聖人に対して与えたように広池千九郎に試験を与えられた」と言うことができるように思われ、また広池千九郎も、その試験を恩寵的試験として受け入れ、ここに神と人が一体となつて最高道德的心使いの地平が成立していることを痛感する。

(二) 最高道德的心使い

『モラロジー概説』には最高道德的心使いとは、諸聖人に一貫する慈悲の心使いであつて、「人間尊重を根本とする心」「公平かつ普遍的に人を愛する心」「人を育て上げる親心」「恩人に対する感謝報恩の心」「理性と感情の調和にもとづく深い思いやりの心」「自分の苦勞の結果を他人に分け与える心」「物事を独占しない心」「すべてのことに建設的に対処していく心」「他人に対して好感・満足・安心を与える心」「つねに自己に反省する心」として、十項目に詳細に表現されている。

しかし、先にも述べたように、このような形で表現されている心使いの表現も、その背後には、広池千九郎の神との感応道交的因果応報確信体験の世界があり、その体験への共感的理解なしには知的・表面的解釈に終わって

しまうことを忘れてはならない。

「然らばすなわち、己れの身に近きものや己れの利害に関係あることに悲哀し、憤慨し、怨恨し、喜憂するは浅薄なることなり。己れを捨てたる聖人の心にあらず。見よ、神はこの森羅万象を包括して喜憂することなく、自然の法則は悠々として迫らず。

何事を見聞しても憂うるなかれ、悲しむなかれ、怒るなかれ、怨むなかれ、不足をつむなかれ。その必要は決してこれなし。悪をなす人にはわざわいの理巡り来り、善をなす人には幸福あり。皆こちらよりやきもきせずとも、天理循環、因縁の理は一糸みだれず、必ずそれぞれに報いあり。その心をもって万人万事に臨み、ただ己れの心を研き己れの本分を尽くし、日の寄進を忘れずば、心広大にして快活なり。正に大宇宙と一致して、心界絨塵なからむ。」

(『広池千九郎日記』大正元年十一月十二日の条)

「実の神のあらわるるのは、こちらの心次第で、いつでも実の神はあらわるるなり」

(同右、十二月十七日の条)

「神様は自我と同じ。天理は神なり。智・情・意の本は自我なり。大小宇宙の間に充滿す。今日は体ありて神あり。始めは神ありて体あるなり。二者はなれず。自我をすてて人のためという心となれば、神があらわれて助かるなり。」

(同右、大正二年一月二十一日)

『道徳科学の論文』では

「およそ慈悲の心は神の心でありますから、人間の精神内に自我というものがあれば、真の慈悲の心は出来ぬ

のであります。それ故に自我を捨つるのみでは消極的であれど、これを捨てざれば真の慈悲の心は出来ぬのであります。さればまず自我を棄ててはじめて伝統及び準伝統に対する絶対服従の心が起こり、かくて何事にも自己反省をするようになれば、不完全ながら最高道徳の門に入ったものといえましよう。」

(『論文』⑦八七ページ)

と、述べられている。このように自分の心のもちかた一つで、自分の生命をも、度重なる苦難をも乗り切つて来た広池千九郎には、自然の法則に従うこと、諸聖人の教説、教訓に一貫する原理に従うこと、神の心に従うことという、先の最高道徳の定義が、極めて身近なものとして、自らの關病生活、宗教的生活の中で、体得・感得されたものであったことが理解出来る。

(三) 自我没却と神意同化

広池千九郎の大正期をみると、限りなく自己の生命、財産、自由をすてて、神の心に没入させ、そこに神の心に融合一体化され、安心を与えられて唯一の活路を見いだすという、生の極限での神人一如的体験の証がある。

昭和初年に執筆されたとある『広池千九郎日記』の記録にも

「助かるということは自己の迷惑を棄つることなり。迷惑を棄てて自己の品性の完成を期し、人心救済の心を起こして、名利を天然に任せ犠牲を覚悟するに至らば、気が楽になる。気が楽になれば安心がついたのである。安心がつくようになれば即ち助かったのである」

(『日記』③六二―六三ページ)

と述べられている。

以上の記述を通して、我々は、最高道徳的心使いの最大のポイントは、「神の心即ち天地自然の法則に、即ち聖

人の慈悲心に、ひいては伝統の教への前に、無我となり、没入するという心の姿勢を持する事である、言い換えれば自我を没却して、神意に同化する」ことであるということを確認することができる。

このような最高道徳的心使いの地平は、基本的には普遍宗教の理念と共通するので、ここだけでは、最高道徳の特質を明確にすることは出来ない。ただ、最高道徳の神についての考え方は、普遍宗教の場合と異なっているので、理論的には神観念の特質として、比較することが出来る訳であるが、本論の趣旨からされるので、この主題については別の論文で取り上げたい。ここでは、最高道徳における神と人間との関係についての広池千九郎の考えの一端を紹介するに止める。

「私どもは最高道徳において聖人の教説を採用し、まず宇宙の現象をもって神の表現となし、私どもの心をもって神の心の分霊となすのであります。且つその分霊の行為が本体の霊の法則と一致する場合には、その分霊は幸福となり、然らざる場合に不幸となるものと見なすのであります。かくて人間の一切の精神作用及び行動の根本が神の恩恵であるということになり、いかなることもすべてこれを神に向かって感謝することになるのであります。これがモフロジの最高道徳における神に対する原則であります。」

〔論文〕⑦二四八―二四九ページ

ここには、人間が日常生活において、真に喜びや幸せを感じる根源は、その心使いと行いが神の法則・神の心に一致していることにあるという神人一体・相関の世界観が表明されている。これは近世の中江藤樹が「人間の心本体は悦びである」と述べた神人一如の究極的真理に通じ、自我没却・神意同化の体得ということを通して体感するということと共通するものである。

このような最高道徳の「神と人との感応道交的共感関係の中に生かされて生きている」という精神態度こそが、日常性の中にある道徳を説きながらその日常的道徳的理性を宗教的・超越的次元での人間関係ならびに物と人の関係にまで昇華していく原動力となっているということが出来る。

四、最高道徳の行為的側面

(一) 最高道徳の存在根拠

このように最高道徳的心使いに基づいて、最高道徳の実行的原理を眺めるとき、私たちは神の心に照準を当てている事が分かる。諸聖人はその教説・教訓・生きた姿を通して、自我を没却し、徹底して神意に同化することの大切さを強調した。

しかしながら、先にも述べたように、最高道徳が先の最高道徳の心情的側面の重要性を説くことで終始していたとすれば、最高道徳という新しい道徳概念(行為を伴った)が存在する必要はなかった筈である。これまでの最高道徳的心使いの世界については、世界諸聖人はじめ、普遍宗教の開祖も十二分に解明している通りである。広池千九郎もその状況を次のように述べている。

「②、十二月六日の神にたいする誓い

診断の結果は病氣は十一箇症に涉りその悉くが致命症であつて臓器不能に陥つて居る、之が停止したら死ぬという次第で全くの大病でありました。その間自分は寝ながらも、神様のお言葉の中でどんな事を実行したら自分分は助かるであろうかと毎日毎夜研究をしましたが遂に十二月六日の晩に至り、今までの自分をざんげし「たんのふ―即ち慈悲寛大自己反省の精神で働き、その結果は之を神に捧げ自分は一代無財産で働く」すれば助か

る事を見出し、七日の朝無理に退院して教会で寝る事と致しました、このたんのふして働き、働いたものは御恩報じにすると云ふ様な心事行為は、古来、釈迦、孔子、基督、孟子、ソクラテス、親鸞、弘法等皆之を行つたのであります。」

〔広池博士講演集〕大正八年、二九九―三〇〇ページ〕

では「最高道德」という道德の存在根拠、言い換えれば最大の特質を何と考えればよいか。先に、神の心即ち天地自然の法則に、聖人の慈悲心に、ひいては伝統の教への前に無我となり没入するという心使いこそが、最高道德の心使いと行為の原点であると述べたが、今度は、その無我となる、ひいては神の心になるために、モラロジイではどのような努力をなせと定言するのであるか。「神に折れ、わが神の行いし如くに人間もなせ」というのが諸宗教の立場であろう。それに対してモラロジイはどのような道德行為を提唱しているのだろうか。

普遍的・超越的な神の心・慈悲心も、それを実行にあらわそうするとき、人間的次元での様々な課題に遭遇する。それが人間の性であったり、民族・国民の伝統の相違であったり、風俗や習慣であったり、組織や団体内の人間のエゴであったり、そこには人間の有限性ととの闘争、自己の運命との闘争を避けて通ることは出来ない。

広池千九郎は、このような諸々の限界状況についても十分に熟慮して、それらの有限性をも越えて、神の慈愛にお返しをするという、誰しもが遵守すべき道德原理として、新しく伝統尊重の原理を発見して世に提示したのである。広池千九郎は「従来の信仰もしくは道德説が自己自身の伝統にのみ重きを置いて他の信仰の対象を排斥するとき偏狭にして且つ利己的なる行為は最高道德においては許容せぬのであります。」〔論文〕⑦二七六ページ〕と述べ、自我没却の方法の第一に「伝統もしくは準伝統に服従し」〔論文〕⑦一九三ページ〕と述べ、「モラロジイの実質たる伝統の原理なるものは……」〔昭和十三年五月十四日の博士の訓示〕とも述べている。

更には「新科学モラロジイ及び最高道德の特質」の伝統の原理の冒頭には、

「モラロジイに於きましては伝統の原理を発見致しまして人間をして真に独立、自由の人格を完成せしむる方法を確定することが出来ました。(中略)

すべて我々人類は此三つの系統(国の伝統、家の伝統、精神伝統)によりて原始時代より漸次に進化さしていただいで今日の文明を形造つたものでありますから、此三つの系統に列せらるゝ所の聖人や偉人は皆、人類全ての大恩人であります。そこで我々は此三つの系統に対して義務即ち借財があるので御座ります。されば此借財を返済せなくては、我々は一人前の独立せる自由人とはなり得ぬのであります、而して此伝統に対する報恩は自分一人の受けた私恩を報ずる事とは違ふので、天地の公道にもとづく所の最高道德になるのであります。」〔特質〕二一五―二一六ページ〕と述べている。

ここに私は、自己の生命並びに生存の根源である諸伝統への感謝報恩こそが、最高道德の中核であり、この伝統尊重の原理の発見とその実行がなければ、義務先行の原理もその理論的根拠を失い、最高道德は神・宇宙自然の法則につながる道德としての生命力を持たなかったと言っても過言ではないと考えている。

先の自我没却・神意同化の原理は普遍宗教の等しく強調するところであって、これに伝統尊重・義務先行という原理が加わる事によって、はじめて、最高道德の道德としての存在根拠とその現実妥当性が生まれてくる。以下、そのことを広池千九郎の足跡から明らかにしてみよう。

そこで以下、広池博士の伝統尊重の足跡を、『日記』を通して辿り、その実行の足跡に現れてくる最高道德の精神・心使いと態度・行為を確認したい。

(二) 最高道德的行為

広池千九郎が「最高道德」という表現を始めて用いたのは、大正三年七月一日の「日記」の条である。

「一昨日、松村幹事来訪され、中学のこと、色々御話合いを致す。次にまた種々の来訪者あり。その中から絶対服従の教理に付き、考えねばならぬことを生ず。元来この教理は、予が数年来、教理の中より見出して、天理教全体を教訓しつつあるものなれども、時には最高道德の開祖たる予の心にも、かかる事はその結果いかなる事になるやとの疑いを生ずることあり。

〔欄外〕注 開祖の意味。絶対服従の教理を発見して、初めて説いた開祖ということである。

換言すれば、自分は自分の因縁の自覚からタンノウすれど、この教理を一般に信ぜざるには、いかにすべしかの問題を度々引き起こすことなり。」

広池千九郎は、大正二年一月二十五日天理教本部に入り、神宮皇学館教授を辞職し、その後天理教教育顧問ならびに天理中学校長の辞令を受けている。大正三年十二月三十一日、広池千九郎が心から信頼し、尊敬し、また互いに頼り、大切にしていた初代管長中山新治郎氏の逝去（ご逝去）に際し、深い悲しみと、天理教の現状と将来に危機感をもって、大正四年一月、管長の追悼講演において天理教改革案を発表した。それがもとで広池千九郎は同年四月、天理教の公職を辞することになる。この事件は、広池千九郎が自らのことを「絶対服従の教理を発見して、初めて説いた開祖」と意味で「最高道德の開祖」と表明したときから、一年も経たない間の出来事であった。

後に、最高道德の中心概念となった伝統尊重の原理に生命を与えたのは、この大正四年四月以後のことであつ

て、広池千九郎は、絶対服従という概念を巡って、神、皇室、政界・財界・軍人、天理教教祖、中山管長、学問上の恩師、上部・下部教会の関係者、並びに一般の信徒に対する最高道德的な生き方を探求する心の遍歴を始めるのである。

以下の「日記」の資料は、その間の心の動きを跡づけるために編年体に配列したものである。

※大正四年 四月十一日

各方面より、予のあまりに天理教に服従することを、意気地なしといわる。

悪党の反対、友人故旧の心配、天理教に対する予の信念、三方より攻めらる。ここが大切なタンノウ所なりと観念す。

※同 四年 五月三十日

(一) 形式的のみならず、真にハーさんに同情してこれを大切に思い、今日までの働きを感謝し、目下の境遇を感謝し、真実、真の心にて同情を表し、精神的物質的に愛情を捧ぐこと。

(二) 古く父母を不足したる理を懺悔し、一段父に対して真実の心を尽くすこと。

(三) ご本部に対しては、根に培うという天啓の精神をもって十二分にその御利益を図り、一切我身の上の名利を図らざることはもちろん、心にも思わざること。

(四) ご本部の個人の上に、それぞれ今一段理を立ててこれを心から尊敬し、愛情を尽くすこと。

(五) 要は今一段各方面に誠の慈悲心を發揮すること。

※同 四年十一月二十八日

管長公一年祭なり。予は何ら本部より招かれず。内輪の人と見られたるのかと、大いに神様に感謝して喜ぶ。(中略)八面玲瓏のザンゲを致す。大々の大懺悔

- (一) 書物を作るのも人心開發救済のためなり。他の人の書物は売るためなり。こちらの書物は人を助けるためなり。心定め大確定。
- (二) 一切の研究、みな人を助くるためにするものなり。毛頭名利の念を持たざるべきこと。
- (三) 講話、講演、一挙一動、必ず必ず人心救済の目的のほかなきこと。
- (四) 御本部大切、根に培うの教理、堅く堅く忘れざるべきこと。
- (六) 一筋心に、国家、皇室、神宮の大々的崇敬心の高調を心がけ、且つ御道にも一筋心となり、両者調和のこと。

※大正五年 四月三十日

根本的大懺悔

- (2) 右につき、心一つの立てかえをなすこと。
- 一、御本部ならびに御本部員御一同を心の底より立つること(理を立て、絶対服従の真の誠の心となること)。
- 二、御本部の道友社、学校すべてを心の底より尊ぶこと。
- 三、先日思い立ちし東京にて教理の雑誌体のもの発行せぬこと。
- 四、御道、天理を基として、決して何事をなすにも名と利と自己とのことを心に持たぬこと。
- 七、慈悲の心にて、いかなるものをも可愛いと思ひ、つまらぬ人に対しても先方の心を買ってやること。一切不足せぬこと。

右、千万人の世界助けの台たる自分の位地を考えて、心をすみ切らせること。

※大正七年 十月二十九日

松村幹事訪問。絶対服従につきて幹事はこれを否定す。故に予は大いこれを駁す。幹事またいわく、理を立つれば可なりと。予またこれを駁していわく、理を立てても人を立てねば不可なり。諸井、いばらき一人は如何と。幹事黙従す。

※同 八年 八月三十一日

右に付き治定。

- (一) 御本部の理に従うこと。
- (二) 甲賀、蒲生、勢山へは金にて理を立つること。こちらは度々布教の応援を話しこめど、力不足の由をもつて断るゆえに、金少々ながらこれを上りて理を立つること。
- (三) モラルサイエンスの完成と上流の布教をなすこと。布教の結果は講社または教会を設け、自ら統率するも苦しからず。この辺はすべて神様任せのこと。
- (四) 住所は東京を八分とすること。

※大正九年 五月五日

右につきザンゲ。

第一、絶対服従すること。

神様や教祖や先人の理のみを立てるにあらず。その筋々の上に立つ人に対しては、現実不徳の人間を立つるに可。

左せざれば、ユニチーが出来ず、平和ができません。

心使いは、いつ何人に対しても、その筋々の上の人には右の通りなれど、通常の際に、心だけにて形は多少折衷することあるべく、また全部従うても、その自己の範囲内でベストを尽くすべきこと。最後重大の場合、大患または危急のときに、ただ一切心形ともに従うこと。

(1) 今死ぬるよりは、今亡ぶるよりは、後日にどんな目に会うも、その方がよいという自己保存の理由から。
(2) 過去の因縁果たしの上から。

(3) 自己保存のために従うことは世界並みなり。その先方を助くるという心使いの上からと、その人に従わねば自分が世界を助くることができぬから、その人に従うのは大慈悲のためなりという上から、一つの菓子箱も、この心にて上の人へつかえば、一粒万倍となる。

※大正十年 八月二十二日

甚だ兆候宜しからざるは、

(1) タンノウの不足と存じられ候間、皇室、本部はもちろん、教会に対しても、その大恩を謝する心を豊富に致すべきこと。

(2) 右にて、すべてを敬い且つ喜ぶこと。

(3) 欲をすてて人心開発救済のためには我が身をいとわず。

(5) モラルサイエンスの大成にますます心を尽くす。

(6) 研究所は自然の成立に任す。

※大正十一年 一月十八日

御本部服従の心一層強く

たとい独立の基礎なるも、人心救済の心はますます励み進み、地方巡回も年一回は必ず怠らぬこと。御本部勤務は、更に更に百倍の心をもって誠実に運ぶこと。

※同 十一年 七月二十四日

日本の文化は、聖徳太子の神儒仏三教を信仰調和せしによること大なり。この故にいかなる万障を排しても、今明年中に皇室に最高道徳を入れ奉ること。このためには本部のお考え通り、本部職員にあらずということに致すこと。(中略)予等臣民は天祖と列聖との御かげにて今日あり。而して教祖と本部との御かげにて魂が救われたるゆえに、第一は、時勢の変化に伴いて、古への人の忠義と形を異にしたる方法(人心開発救済)にて皇室へ御報恩をなす。これ現代の最高道徳、最大忠義ならん……

※同 十一年 八月三日

すべて馬鹿にせられて、これをタンノウする心使いありてこそ、今世界中第一の最高道徳者なれ。これにモラルサイエンスそのものに偉大なる世界助けの生命を生ずることと思わる

※同 十一年 十月十日

予はあくまで理を立てて、本部と勢山とを尊び、一日も心をこれよりはなつことなし(教祖、先管長、中山家、本席、甲賀、勢山一統)。ほかのものも尊重す。

◎一言一句も心の中にも本部その他のことをわらく思わず、言わず、専ら慈悲の心をもって、自己反省しつつ研究救済に努力す。

※同 十一年 十二月十八日

大正十二年以降、心定め。

(1) いかなる事情あるも本部に絶対服従のこと。これは本部に服従するわけにあらず。自己の神に対する最高義務として、自己の道德的生命のために服従するなり。

※大正十二年 二月八日

本に付かざれば、本を改造するを得ず。故に本部直轄ができればそうしてもらふこと。責任大なれど、これが人類に尽くす大なるつとめとなるなり。

※大正十三年 七月十五日

一、いかなる事あるも、根に従い根に培うこと。

※大正十四年 六月二十日

(1) いよいよいかなる事あるも、御本部へ絶対服従のこと。

1 世界の平和はこれよりほかなし。

2 御本部のほか服従するところなし。皇室には何人も服従する。且つ合理的なればこれに服従せぬものなし。

御本部にしてこそ真のタンノウなれ。

※大正十五年 十一月九日

二、十六年夏頃までに研究所を成就したし。十六年間に一切の事を完成したし。

三、右の基礎出来の上は、管長様に対してお道の復古を勧誘す。而してこの勧誘は神様に一致する至誠の

心をもって、徐々に温和に、再三再四どこまでも広き長き心をもって、徹底的に御教祖と先管長様との御精神をお道の中に復古するように尽力す。

※昭和三年 一月四日

いろいろ御熟考の上、神様の御許しを得て講社をつくり、人心救済のため御努力なされる治定され、四月御帰本の上、右手続きをなされ、ついに大正十二年四月十五日、神恵講下付きる。

爾来神恵講の名をもって救済に従事せしも、宗教の弊害多きため、神恵講の名をもってしては中流以上を救済することの困難を感じられ、神様に御伺いの結果、天理教の信仰は潜在的伝統として天照皇大神を顕在的伝統として救済に従事す。

※同 三年 十一月三日 伊勢神宮参拝 第一 五十鈴河畔の教訓

このような概括的な跡づけでは十分とは言えないが、これらの足跡の中に、広池千九郎の(最高道德的)心使いと行為の特徴を確認する事が出来るであろう。

(三) 伝統尊重と人心開発救済

広池千九郎の最高道德実行の实质・内容を理解するためには、『広池千九郎日記』を通して、明治四十二年の天理教入信から昭和三年の『道德科学の論文』完成までの、自我没却・神意同化・伝統尊重・義務先行・人心開発救済の跡をつぶさに味わい、広池千九郎との対話が必要不可欠である。上記『日記』をたどってみると、広池千

九郎はこの時期に、ヤスパースの限界状況にも匹敵するように、死・苦惱・闘争・負い目という限界状況と真正面から取り組み、いよいよ深く、いよいよ低く、いよいよ広く、神・聖人の慈愛に噛み砕かれ、神人一如の生涯を体験していることが確認できる。

ただこの時期に特筆すべき伝統尊重の精神に基づく行為の本質は、絶対服従という概念との関わりで見えていく時、より明らかになって来るように思われる。

広池千九郎が大正三年七月「最高道德の開祖」と書いた時、絶対服従の教理の深い真理を発見している訳であるが、広池千九郎自らがこの大正年間に、天理教内外の人々との人間関係の中で、また人間関係の中から、真に絶対服従の教理を生き抜いたのである。その間の様子を特徴的に表しているのが、大正七年十月二十九日、大正九年五月五日、大正十二年十二月十八日の『日記』の条である。

そこには、単に特定の人物に不本意ながら服従するとか、知的に理に合するために服従するという理解の次元から、より深い、神に対する最高の義務として、その人物に安心と満足を与える事が出来なければ、理に合していても、結局相手を切る事になる、即ち神の心に反するという精神から、天地自然の法則の前に頭を下げ、絶対服従するという心使いと行いにまで到達している事が現れている。これは普通の日常の次元で言う中庸を包み、越えた絶対的な中庸を得た態度とも言えよう。この時期のことを、先にヤスパースの限界状況に比したが、それは広池千九郎が伝統尊重の精神に基づきながら、実は伝統側の人だけでなく、あらゆる人（後に人類と表現するが）に安心・満足を与えるという人心開発救済の地平に、同時に立っていたからこそその緊張であり、苦惱であり、闘争であったことが解る。

このように見て来ると、広池千九郎にとっては伝統尊重も人心開発救済とともに、根（宇宙・天地・神の慈愛）につながり、根を育むことを教え、根とともに至誠をもって試練を乗り切って行くところに、必ず大きな恩寵があるということ教え、導く原理であることが解る。

ただ最後に、最高道德は広池千九郎の学徳ならびに至誠と、天理教の教団内部の人々の至誠との緊張・対決・闘争のなかで結実したものであって、その両者の貴い苦難があつて初めて普遍的な実践原理になっていることを確認しておく。

五、最高道德の特質

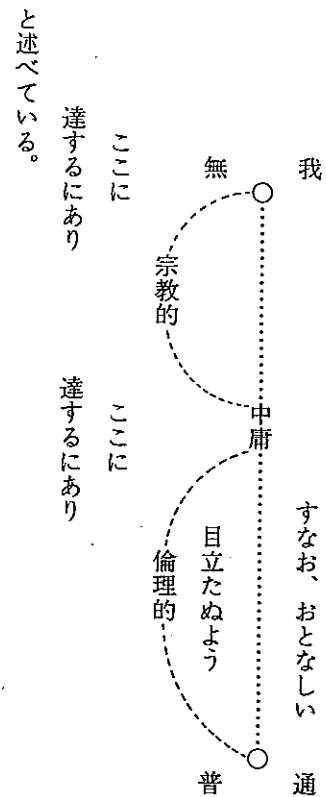
ここまで述べて来て今感じることが、最高道德はその心使いにおいて、宗教者に匹敵するだけの精神的な純粋性を持ち、且つ追及し、その行為的側面において、倫理学者や道德実践家とは違った、社会的正義と中庸を実現するという、極めて現実的・社会的・実践的性格をもったものであることが分かる。そのことを先の三章では、最高道德の心的側面として、自我没却・神意同化の超越的・宗教的特質を紹介し、次の四章では、行為的側面として、現実性・中庸性・超越性を合わせた伝統尊重・人心開発救済に見られる特質を紹介した。このような日常性と超越性の両面を有する道德概念を、広池千九郎はどのように考えていたのであろうか。

この最高道德の価値概念を理解するうえで参考となるのが、次の文章である。

『広池千九郎日記』大正三年七月十日の条に

「御道は無我というだけではないかぬ。教祖の行なえる真の無我の道を標準として、自己の自由意志と因縁との調和のうえに立てるところの、ある一の無我の状態に居り、無我に達せんと努力するなり。しこうして中庸を行なうに在り。恐ろしきむつかしきことなり。心使いも行ないも、すなお、おとなしく、目立たぬよう、

人の心をいたためぬようを尚ぶ。故にこれを中庸というほかなし。しかし、やはり自分の到達せんとする目的地は無我にあり。また自分の信念は無我に在るなり。つまり、一時に倫理の上乗点と宗教の目的とを併得せねば真の信仰にあらず。



この「一時に倫理の上乗点と宗教の目的とを併得せねば真の信仰にあらず。」と述べられているところに最高道徳の特質があるように思われる。ここでは真の信仰と述べられているわけであるが、このような考えそのものが極めて特殊な信仰観であり、極めて広池千九郎に独自の宗教観・倫理観であるといえるからである。しかもこの条が先の「最高道徳の開祖たる予の心にも……」という記述の出でくる同年七月一日から、ほぼ一週間後の七月十日の条であるということも、極めて特筆すべき事であるように思えるのである。ここでは広池千九郎は「真の信仰」という表現を使っているが、当時の広池千九郎の状況・心境を考えてみると、宗教的には真の信仰という表現になるのであるが、最高道徳という視点からこの表現を吟味するとき、最高道徳の本質・内容をこのよう

形で表現しているようにも思われ、極めて示唆にとんでいると思われる。

これらのことは、後に完成された『道徳科学の論文』にある

「最高道徳の基礎的観念の第一は正義及び慈悲にあること」

〔「論文」第四章第五項〕

「古来、世界の諸聖人及び大識者は一般に神の本質をもって正義及び慈悲となしておるのであります。」

〔「論文」⑦五〇ページ〕

「この正義及び慈悲は知識と道徳とに当たるのであります」

〔「論文」⑦五〇ページ〕

「宇宙的正義と人間的もしくは社会的正義との実質」

〔「論文」⑦六八ページ〕

「宇宙的正義はその本質は全く神の慈悲心と一致するものというほかはない」

〔「論文」⑦七七ページ〕

「最高道徳にては正義実現の目的は他と同一であれど、正義実現の方法において全く他と異なりて、純正義に

〔「論文」⑦一一三ページ〕

はよらずして、まさに正義の基礎に立つところの慈悲によるのであります。」

などの表現と併せて考えるとき、深い意味が含まれていると思われる。

正義と慈悲、社会的正義と宇宙的正義については、今後も広い立場から考察を加える必要があると思われるが、本小論では、広池千九郎の「最高道徳」という価値概念に、宗教上の目的である慈悲心・仁・愛の極致と、道徳・倫理上の最高極致である至高善や中庸を併せて観念していたという見方を確認しておくにとどめる。上記課題については、宗教性と倫理・道徳性を含んだ、最高道徳の学問的性格づけの考察として、今後も継続的に研究を進めて行きたい。